遊戯の終り

J・コルタサル　木村栄一訳

国書刊行会

ラテンアメリカ文学叢書5　編集—鼓直

遊戯の終り

著者——J・コルタサル
訳者——木村栄一（きむらえいいち）
定価——二二〇〇円

本書はセイユウ写真印刷株式会社と凸版印刷株式会社との協力により一九七七年十月二五日印刷製本され国書刊行会（佐藤今朝夫——東京都豊島区巣鴨三—五—一八電話〇三—九一七—八二八七振替東京五—六五二〇九）により一九七七年十月三〇日その初版第一刷が刊行された。

遊戯の終り

J・コルタサル　木村栄一訳

国書刊行会

遊戯の終り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

本書は、
鼓直（法政大学）の編集による
ラテンアメリカ文学叢書の一冊（第五巻）として
刊行された。

遊戯の終り　J・コルタサル　木村栄一訳　国書刊行会

I

続いている公園

彼は二、三日前にその小説を読みはじめた。急用があり一度投げ出したが、農場にもどる列車の中でふたたび手に取ってみた。物語の筋と人物描写が少しずつ彼の興味を引きはじめた。午後は代理人に手紙を書き、農場監督と共同経営のことで話し合った。そのあと、樫の木の公園に面した静かな書斎で本に戻った。不意に人が入って来そうで落ち着かないので、ドアに背をむける格好で愛用のひじかけいすに腰をおろし、左手で緑のビロードを撫でながら残りの章を読みはじめた。人物のイメージや名前が頭に残っていたので、たちまち小説の架空の世界に引き込まれた。読んで行くうちに、まわりの現実が遠のいてゆく。頭はビロードの背もたれにゆったりもたれかかり、煙草は手の届くところにある。大窓のむこうでは夕暮れの大気が樫の木の下で戯れている。なにか罪深い楽しみを味わっているような気持になった。主人公たちは下らないジレンマに悩んでいた。夢中になってストーリーを追って行くうちに、イメージがはっきりと像を結び、色彩と動きを伴うようになった。彼は二人の人物が山小屋で最後の逢引きをするところに立ち合った。最初、女が不安そうに入って来た。続いて、男が現われた。その男は木の枝で顔に怪我をしていた。女は口づけで血を止めてやろうとするが、男はそれをはねつけた。そこに来たのは、枯葉と間道で

守られた世界で秘めやかな情熱の儀式をくり返すためではなかった。胸にひそめたナイフは生暖かくなり、その下では囚われた自由が息づいていた。あえぐような会話が何ページにもわたって続く。すべて宿命の定めに従っているように思われた。女は引き止め、思いとどまらせようと男を愛撫する。その愛撫までが、もうひとりの男、どうしても殺さなければならないあの男の身体をいまわしくも描き出していた。アリバイ、偶然、犯しかねない過ち、なにひとつ欠けていなかった。そのあと、物語は少しのたるみも見せず展開して行く。無慈悲な殺人の計画は、女の手が頬をやさしく愛撫する時も休みなく練りあげられた。

逃れることのできないつとめに縛られた二人は、小屋の戸口で別れる時も顔を見交さなかった。女は北に抜ける間道を通るはずだった。男が反対の道からちらっと振り返ると、髪を乱して駆けてゆく女の姿が目に入った。男は木々や生垣の間を縫うようにして走り出した。たそがれの葵色の靄の中に、あの屋敷に通じるポプラ並木が浮かび上がった。思ったとおり、犬は吠えなかったし、農場監督もいなかった。三段あるポーチを駆け上がると、屋敷の中に踏み込んだ。耳鳴りとともに女の言葉が聞こえてきた。青い部屋の次はホール、そのむこうに絨毯を敷いた階段があるわ。見上げると、ドアがふたつあった。最初の部屋には誰もいない、二番目の部屋にも。広間のドアが目に入った。ナイフに手がかかったのはその時だ。大窓から光が差し込み、緑のビロードのひじかけいすの高い背もたれには、小説を読んでいる男の頭が……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

誰も悪くはない

夏だと世界がひどく身近なものに感じられるのに、寒くなるといつもことが面倒になる。六時半、妻は結婚祝いの品を選ぼうと、ある店で待っているはずだ。もう間に合わない。肌寒かったので、彼は青いセーターを着ることにした。グレイの服に合うものならなんでもよかった。秋になると、セーターを脱いだり着たり、身にそわしたり風を入れたり忙しいことだ。面倒くさそうにタンゴを口笛で吹きながら、彼は開け放した窓から離れた。衣裳ダンスからセーターを引っぱり出して、鏡の前で着はじめたが、うまくゆかない。きっと下着がウールのセーターにからみついているのだろう。ねじこむように手を通してゆくと、わずかだが通ってゆき、やっと青いセーターの袖口から指が一本のぞいた。夕方の光を受けたその指は内側に折れまがり、皺だらけで先には尖った黒い爪がついている。驚いてセーターから腕を抜き出して、ひとの手でも見るように眺めた。こうして見ると、べつに変わったところはない。力を抜いて腕をだらりと下におろした。もう一方の袖に手を通したら、案外うまく行くかも知れない。やはりだめだ。セーターのウールがまたしても下着にからみついている。その上、いつもと逆の順序で手を通したのでいっそう面倒なことになった。気を紛らわそうともう一度口笛を吹いてみたが、手はいっこうに通らない。なんとか助

けてやらないと手が外に出そうにない。ひと思いに着た方がいいだろう。まず、頭をセーターの首のところにもって行く。空いた手をもう一方の袖に入れて、両腕と首を同時に伸ばしてみた。とたんに青い薄闇に包まれて口笛を吹くのがばかばかしくなる。顔が火照りはじめた。頭の一部は外に出ているはずだが、額から下はセーターにすっぽり包まれている。手の方も袖の中程で止まったままで、いくら力を入れても通らない。着直す時に、ばかばかしい気がして腹を立てたのが悪かったのだ。どうやら手をセーターの首に通し、袖に頭を突っこんでしまったらしい。しかし、それなら手はもっと簡単に通るはずなのに、いくら突っぱっても両手とも少しも前に進まない。青いウールが口や鼻を腹の立つほどつよく締めつけ、思ったよりも息が苦しくなりはじめた。すると、頭の方はもう少しで外に出るのかも知れない。息を大きく吸いこまなくてはならないが、そうすると口のあたりのウールがじっとり濡れてくる。セーターの染料が落ちて顔が青く染まっているにちがいない。さいわいその時、右手が冷たい外気に触れた。左手の方はまだ袖の中だが、少くとも片手は外に出ている。たぶん、右手をセーターの首に通してしまったのだろう。首だと思ったところが袖だったものだから、顔が締めつけられて息が苦しいのだ。それに、右手はすんなり通った。ともかく、息を大きく吸って少しずつ吐きながら手を通して行くよりしかたがない。そうすれば、気分も落ち着くだろう。もっとも、セーターの首だか袖のあたりの毛糸の屑を吸いこむ気なら、息をするのに差支えなかった。べつに大騒ぎすることもない。セーターの味、ウールの青い味がする。息をするのでウールがじっとり濡れてきた。おそらく、顔は青い染料に染まっているだろう。まつげがウールにあたって、目を開けようにも痛くて開けられない。ウールの青い色は、濡れた口許や鼻の穴ばかりでなく頬の

あたりまで青く染めているのだろう。彼は不安になってきた。約束の時間はもう過ぎてしまった。妻はいまごろ苛々しながら店の入口で待っているはずだ。それはともかく、なんとかしてセーターを着てしまおう。右手がセーターの外に出て、部屋の冷たい空気に触れているのだから、その手を活用しなくては。彼はそうつぶやいた。右手はもう少しだと教えてくれているようだし、その手を背中にまわしてセーターの裾を引っぱってやることもできる。力いっぱいセーターを引っぱって着るというのは古典的な方法だ。ところが背中に回した手はセーターの裾をつかもうとやっきになっているのに、肝心のセーターは首のところですっかり丸まっているらしい。いくら探ってみても、手に触るのはシャツだけだ。おかげで、シャツに皺が寄り、ズボンからはみ出してしまった。手を前にまわして、セーターの裾を引っぱってみようとするが、これもうまく行かない。胸のあたりを探ってみるが、触わるのはやはりシャツばかりだった。セーターは肩口で丸まっているにちがいない。セーターが小さくて肩を通らないのか、そこで団子のようになって動きがとれない。これで納得がいった。へまをやらかしたのだ。片方の手をセーターの首に通し、もう一方の手を袖に入れてしまったのだ。セーターの首は両腕の中間にある。彼の首が左側に少し傾いているのは、袖に頭を突っ込んだせいだ。左手は袖（袖かどうか確かめようがないが）の中でにっちもさっちも行かなくなっている。一方、右手はすでに通っていて、外を自由に動きまわっている。もっともその手にしても、首のところで丸まっているセーターを引き下げることはできない。いすが近くにあれば、腰をおろして休憩できるし、セーターを着るまで楽に息ができるはずだ。そう思うと、なんだかばかばかしくなった。服を着る時はいつも、徒手体操をするようにくるくる回るが、おかげで方角が判らなくなった。

こっそりダンスをしているように見えるかも知れないが、踊りたくてしているのではない。必要上そうしているのだから、端からとやかく言われる筋合いはない。いずれにしても、セーターが着られないのなら、いったん脱いで、手をきちんと袖に入れ、首に頭を差し込むべきだ。ところが、右手はいまさらセーターを着直すなどとんでもないと言わんばかりに、めちゃめちゃに動きまわっている。それでも、思い出したように彼の意志に従って頭のところまで持ち上がり、セーターを上に引っぱりあげる。その時はじめて気づいたのだが、青いウールのセーターは湿気を含んだ息のせいでゴムのように顔に貼りついていた。右手がセーターを引っぱると、耳がもげ、まつげが抜けそうに痛んだ。もう少し加減してやろう。まず左の袖（それが首でなく袖だとして）の中の手をうまく利用しなくてはいけない。そのためには右手の助けを借りて袖に通すか、引き抜くことだ。しかし、両手の動きをうまく合わすことなどとてもできそうにない。左手はネズミ取りにかかったネズミのようだし、外からはもう一匹のネズミが中にいるのを逃がしてやろうとしている。いや、そうじゃない。外のネズミは助けるどころか噛みついているのだ。突然、袖の中の彼の手に痛みが走った。右手が袖の中の左手に猛然と噛みついたのだ。痛くて、とてもセーターなど脱げたものではなかった。わなにかかった左のネズミを外に出してやり、頭をセーターの首に通してしまおうとありったけの力をふり絞った。部屋の真中でくるくる回転したり、前につんのめったりうしろに反り返ったりしながら、セーターを相手に大立回りを演じた。しかし、そこは部屋の真中だろうか？　窓はたしか開け放ってあるはずだ。こんな風に盲滅法に動きまわるのは危険にちがいない。一息つきたいのだが、右手はセーターのことなどお構いなしに動き回っているし、左手の指は噛まれたか火傷でもしたように痛

みがひどくなりはじめた。それでも左手は彼の言いつけを聞いて、傷ついた指を少しずつ曲げると、肩のところで丸まっているセーターの裾を袖の中からつかんだ。下に引っぱろうとするが、力が入らない。痛くてだめだ。こういう時こそ助けが要るのだが、右手は太腿のあたりを徒らに這いまわり、ズボンの上から脚をつねったり引っかいたりしている。止めようにも、左手に気を取られて思うにまかせない。たぶん膝をついたのだろう。左手がふたたびセーターを引っぱろうとするが、身体はその手に吊り上げられたようになった。急に目や眉、額のあたりになにか冷たいものが触れた。ばかばかしい話だが、目を開ける気がしない。一秒、二秒待った。彼はいまセーターの外の時間、冷たい異質な時間を生きている。跪いたまま、なんて素敵だ、それにしてもありがたいことだと考えながら、唾液に濡れた青いウールから解き放たれた目を少しずつ開いた。薄目を開けると、五つの黒い爪が彼の目に狙いをつけて、今にも襲いかかろうと空中で震えている。あわてて目を閉じると、反り身になって自分の手である左手で目を覆った。自分に残された唯ひとつの手、左手が袖の中から彼を守り、セーターの首を引き上げる。またしても顔が青い唾液に包まれる。どこかへ逃げよう、手もセーターもないところへ逃げよう。そう考えて彼は立ち上がった。自分をやさしく包み、どこまでもつき従ってくれる騒がしい大気へ、十二階の窓の外へ。

セーヌ河に身投げしてやるわ、たしかそんなことを言っていたね。夜もふけ、灯を消すころになるといつもこれだ。シーツにくるまり、手か足でぼくの身体に触わりながら、きみは眠そうな声でやりはじめる。目を閉じてふたたび眠りこんでゆくぼくの耳にその声が聞こえてくる。ああ、わかったよ、身投げするなり、棧橋から川を眺めるなり好きにするさ。ぼくが眠る前にきみは出ていった。いや、やはり、行かなかったんだね。今、ここで軽い寝息を立てて眠っているもの。セーヌ河で身投げしようと思ったけど、こわくなって止したの。たしかそう言っていた。気がつくと、きみはぼくのそばで寝苦しそうにしていた。セーヌ河の棧橋から身投げした夢か、悲しい夢でも見ているのだろう。以前にも、こんなことがあった。愚かしい涙で顔を濡らし、朝の十一時まで眠ると、新聞が届く。そこには、セーヌ河に身投げした人の記事が載っているってわけだ。

きみはおかしな人だ、悲愴な決意をしたり、ドサ回りの役者が家の戸口を叩いてまわるような格好で歩きまわったりしてさ。下らないおどしをかける、人を脅迫する、かと思うと、ごたいそうな文句を並べて、涙ながらに哀れっぽく身の上話をする、いったいあれは本気なのかい。もっともらしい返事が聞きたけれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb